

その結果、4才以上のオトナオス11頭のうち上位3頭では順位が子どもの数に反映されていないことや、出自母系内でのインセスト回避の傾向が示唆されている。

今年度の研究では、若桜グループにおいて1987年から1989年の交尾行動の観察と翌年生まれた子どもの父子判定を毎年継続することにより、個体の年齢、順位の変化に伴い交尾行動が変化することが示された。1989年の交尾期に共同研究者の光永、野崎らがホルモン測定により推定したメスの排卵日と、コンソート関係による独占的な交尾が観察された日が必ずしも一致していなかった。また父子判定の結果コンソート相手のオスが父親になっていない例があり、交尾にかかるコストが必ずしも子どもの数に反映されていないこと、行動観察のみによる父親の推定が困難であることが明らかにされた。

オスの移出入のある野生群で子供の父親がどうなっているか調べるために、宮崎県幸島の野生ニホンザル2群約100頭を捕獲して採血し、1978年から1989年に生まれた子ども36頭の父子判定を行った。その結果放飼場と同じく、高順位オスが大部分の子どもの父親になってはいないこと、メスが子どもの父親を変えていること等がわかった。また群れに所属していないオスも群れ内に子どもを残していた。二つの群れ間のオスの出入りと子どもの父親との関係や、オスの移入直後と定着して年月を経た後との子ども数の変化などについて、さらに詳しく検討する予定である。

ミニサテライトDNAの安定性と遺伝様式を調べるために、親子関係のわかっている筑波医学実験用霊長類センターのカニクイザル50組を解析した。その結果判定に用いているミニサテライトDNAが極めて安定な遺伝をすることがわかった。

#### 課 題 4

##### 計画4-1:

リスザルの“会話”行動の集団比較

服部正策(東京大・医科研)

共同研究の実施場所として予定していた東京大学医科学研究所奄美病害動物研究施設は平成2年9月8日の台風19号の接近により施設内が冠水し、

建物、敷地、設備などに多岐にわたる被害を出しました。そのため、共同研究の実施が困難になりましたので、本年度の共同研究を辞退致します。貴研究所からのご支援を当施設の一方的な都合により破棄しご迷惑をお掛け致したことに深くお詫び致します。

##### 計画4-2:

ニホンザルにおけるクー・サウンドコミュニケーションの群間変異(Ⅱ)

宮藤浩子(日本モンキーセンター)

本研究の目的は、クー・サウンドコミュニケーションの様相や機能に群間変異があるか検討し、変異の要因を明らかにすることにある。昨年度までの宮崎県串間市幸島での調査から、クー・サウンドの発声頻度やなきかわしのネットワークが群れの大きさによって異なることが明らかになった。また、空間分布や採食活動と音声コミュニケーションはよく対応し、遊動時の音声コミュニケーションの機能はどの群れでも一定であると予想された。今年度は、変異の要因が群れの大きさ、地域差、あるいはそれ以外のもののどれなのかを明らかにするため、宮城県牡鹿町金華山のA群(約40頭)、B1群(約20頭)、D群(約70頭)を集中的に調査し、以下の結果を得た。

幸島との相違点: 音声コミュニケーションが極端に少ない。各個体の発声頻度は非常に低く、音圧も低くて、継続時間も短い。複数個体によるなきかわしは1日にせいぜい数回であった。また、空間構造やアクティビティーの同調から、群れは非常にまとまりがよく、個体ごとにバラバラに動いて採食するようなことはないことがわかった。

金華山の3群間の変異: 音声コミュニケーションの頻度には変異がないが、群れ内の空間構造には変異があり、個体数の多いD群では $\alpha$ ♂と $\beta$ ♂を中心に年齢クラスごとの分節化が occurring いた。

以上より、クー・サウンドコミュニケーションの群間変異には群れの大きさよりも、各地域個体群が持つ空間構造や遊動パターンの違いが大きく影響していることがわかった。個体本位に遊動し採食する幸島では、遊動の節目ごとに音声コミュニケーションが果たす役割がはっきりしていた。一方、金華山ではどの群れでもコンパクトなまと